あたしは天下のオジョー様！

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしは天下のオジョー様！

【Ｎコード】
Ｎ９８５２Ｚ

【作者名】
葵

【あらすじ】
あたし、楠木日向！
ちょーっと風紀の悪い学校を仕切ってる
世間一般に不良ってヤツ。
あ、そこまでガラ悪くないから。
むしろ正義のヒーローだから！

そんなあたしだけど、
ひょんなことから世界屈指のオジョー様になることに！
ちょっと、ちょっと、ちょっと！
あたしの生活どうなっちゃうの？！

第1話

いっやほー！
はじめましてー！

あたし楠木日向（くすのきひなた）！
中学から徒歩5分に住んでる14歳。
ピッチピチの14歳！
あ、2回言っちゃった。
とにかく今日から中学3年生！
もう気合い十分だよ！
制服バシッときまってるし、気分上がる！
憧れの中3！
ついに、あたしが川中（かわちゅう）の女王に！

説明がまだだったね。
気分がよすぎて取り乱しちゃった。
川中っていうのはあたしが通う川崎中学校のこと。
不良が集まったご近所でも評判の中学校。
奥さまの井戸端会議でもよく出る話題。
ようするに不良の巣窟ってこと。
で、川中は代々中3の女子が支配することになってる。
なぜかはあたしにもわからない。
川中7不思議の1つ。
解明はされてない！
されてないから7不思議なのか……。
ちなみに15代まで続いてる。
歴史長いよね。
で、その支配者をこう呼ぶ。

女王。

第2話

でね、その由緒ある女王にあたしが選ばれたの！
すっごく嬉しい！
だってあの女王だもん！
テンション上がる！
今まで長かった……。
あたしが川中の支配者に！
ほんとダメ。
気分上がりすぎて死んじゃう。
学校着く前に死んじゃう。

あ、学校が見えてきた。

もうスキップだよ！
空までランニングできそうな気がしてきたよー。
空まで行っちゃったらそこは天国だけどね。
女王になる前に死んじゃうけどね。

ああ、校門が華のゲートに見えてくる！
ボロボロの校門にとりえ発見！
こういうときはいいよね！校門。

なんか廊下が赤い絨毯に見えてきた！
落書きだらけだけど、輝いて見える。
こんなに廊下って素敵だったのね！

「あ、こんちは。楠木さん」
怖そうなお兄ちゃんに頭を下げられる。

ノンノン！
あたしは「女王様」なんだから！
楠木さんなんて呼ばれるのも今日で最後！
そう思うとにやけてくる。
ああ、こんなとこでにやけてたら変人だわ！
メンツ台無しよ！

第3話

「もーすぐねぇ」
時計が指すのは8時半。
あとちょっとで女王任命式！

え、授業始まるんじゃないのって？
不良が授業出てるわけないじゃない！
たまに出てるけどさ。
あたし、社会だけはできるんだよね。
あ、あと体育と音楽と。
ほかはダメダメだから出る気なし！

廊下を歩いてるとたくさんの人に頭を下げられる。
この崇拝度！
半端ないね。
ほんとにどっかの国の王女みたい！
ま、あたしは川中の王女なんだけどね。

いつもの音楽室へいく。
ここが不良のたまり場になってる。
あー、今日もたまってますね。
いつも以上にたまってますね。
あったり前よね！
だってあたしの任命式なんだもの。
みーんな来るわよね。
来ないとどうなるかわからないしー。
御苦労さまー。

「はーい、日向こっち来な」
卒業したはずの15代目王女が手招きをする。
任命は元女王がすることになってる。
わざわざ来てくれるんだよね。
ということは来年私がやらなきゃいけないのか。
面倒だな〜。

「はい」
私は壇にあがる。
このボブの茶髪の綺麗なお姉さんが15代目。
いつみても綺麗でうらやましい。
形のいい唇を開く。

「15代目女王、桜がこの者を16代目と認める」

パチパチパチ！

大きな拍手があがった。
みんなが祝福してくれている！

「あなたの名前は千影よ」

女王は名前では呼ばれることはない。
そんなの、恥になる。
だから、女王は新しい名をもらう。
この人も、桜という名ではない。
あたしの場合は千影。
千影……。

「あたしは千影！あたしが女王よ！」

皆が一斉に頭を下げる。

あたしは……１６代目女王、千影よ！

第4話

「さっすが、ひな……千影様っ！百合(ゆり)感激です」
「そう？ありがと」

このすっごくかわいい子は木下百合(きのしたゆり)。
すごく幼く見えるけど中2。
そしてこの子も不良。
まったくそう見えないんだよね。
背は低いし、声は高いし。
でも、不良。

「百合、一生千影様についていきます！」
「遠慮しときます」

一生ついてくるのは迷惑かも。
なぜかあたしにすっごくなついている。
謎だなぁ。

ほんとにこれでいいのかな？
あたし、何度も同じことを思ってる。
百合、こんなにかわいいのに。
あたしについてきていいの？
間違ってる。
間違ってるよ。
百合は来ちゃいけない。
こっちの世界に来ちゃいけない。

前に聞いたことあったっけ。

不良でいいのって。
そしたら百合は言ったよね。
「これでいいんです」って。
笑ってた。
でも、すごく悲しそうだった。

問い詰めはしないけどさ。
不良には、いろいろあるから。
あたしだって例外じゃないし。
こういうことって聞いちゃいけないの。
不良の中の暗黙の了解だから。

第5話

「ただいまー」

一日終わって家に帰宅。
今日はずっと頭をペコペコ下げられた。
気持ちはいいけど、ずっとっていうのはねぇ。
なーんか変な感じ。
初日なんだし、当り前か。
今のうちに気に入られたいって考えてるのかな。
あたしも昔はそうだったし。
女王のお気に入りは、特典いっぱいだからさ。
いろいろと便利。
次期女王も夢じゃなくなるし。
あたしは単純に桜様が好きだったから一緒にいたんだけどね。

「おかえり。さ、ご飯食べようか」

この男の人はあたしの叔父さん。
お父さんじゃなくて叔父さん。
お母さんの弟なの。
ちなもに名前は幸弘(ゆきひろ)さん。

あたしのお母さんとお父さんは5年前に他界した。
不幸な火事だった。
隣の家の人の寝たばこが原因で、あたしの家に燃え移った。
あたしは一人になっちゃった。
そんなときに幸弘叔父さんがあたしを引き取ってくれた。
幸弘叔父さんはまだ結婚してないから、あたしと2人暮らし。

これはこれで満足してる。
叔父さんはあたしが不良なのを知ってる。
知ってるけど止めない。
止められてもやめる気はないけどさ。
なんでだろーね。

「あ、きんぴらごぼうおいしい！」
「この、ほうれん草もおいしいよ」

見ての通り、裕福とはお世辞にも言えない。
だけど、あたしはこれがいいの。
だって、楽しいもん。
こんなご飯でもおいしいもん。

……すくなくとも、1人になることはないから。
1人ぼっちはもうやだ。
誰かと一緒に暮らしたい。
だからあたしは大満足。

第6話

「おはよう。幸弘叔父さん」
「ああ、おはよう。ひなちゃん」

今日は余裕をもって起きることができた。
いつもは遅刻寸前。
授業にじゃないよ。音楽室に。
だから朝ドタバタするのにも幸弘叔父さんは慣れてる。
だけど今日は6時半に起きたから、びっくりしてる。
もー、あたしをなんだと思ってるのよ！

「髪、ボサボサだよ。とかしておいで」
近くにおいてある手鏡であたしの現状を確認。
あー、これはひどい。
惨劇のあとみたいになってる。
大きな鏡のある場所まで行って、ブラシで丁寧に髪をとかす。
胸下まである焦げ茶の髪がいつもみたいに戻っていく。
このままなおらなかったら、どうしようかと思った。
だって、これじゃ学校にも行けないよ！
あたしも一応髪を染めている。
金髪とかは嫌だから、焦げ茶を選んだ。
ほんとは黒いままでもよかったんだけど、やっぱりそれはね。
不良の威厳が台無しになっちゃうからって言われて染めたの。
それに、幸弘叔父さんの迷惑にはなりたくなかったし。

「いってきまーす」
8時になったから家を出る。
家の前には百合。

「千影様！おはようございます」
「……」
……何でいるの？
あたし、別に約束してるわけじゃないし。
そもそも百合に住所教えたっけ？
この子、もしかしてストーカー？
「百合、ずっと待ってました」
何分待ってたの？
いつからいたの？！
聞けない……。
怖くて聞けない。
ていうか、待ち伏せの間違えじゃない？
「危険ですから、百合が行きと帰りをご一緒させていただきます！」
「御遠慮させていただきます」
……この子、やっぱり危険だわ。
今すぐ警察に……！

「ちょ、ちょっと！」
「おじさーん、お金あるんでしょぉ？お小遣いちょーだーい」
近くの路地から話し声が聞こえてきた。
「百合、静かにして」
1人で話を進める百合をひとまず黙らせることに成功した。
「ほらー。いっあいあるじゃーん」
路地をそっと覗く。
そこには制服を着た2人の男子学生。
あの制服は……。
「紀乃川中ですね」
いつの間にか横にきていた百合があたしが答えを出す前に言った。
紀乃川中……。
あそこは、最悪の中学校。

あたしたちの学校と近いけど、仲はものすんごく悪い。
何かあるたびに喧嘩してる。
だって、本当にあの中学校は最悪。
あたしが女王になったからにはあの学校はつぶしてやらないといけない。
そう考えてたけど、早くもあいつらと会うことになるなんて。
偶然にもほどがあるわ。
朝から騒動起こして。
ほんっとうに面倒な奴らだわ。
あたしがぎったんぎったんにしてやる。
「百合、下がってなさい」
「いえ、百合が行きます」
下がってなさいって言ったのに、百合はあの2人の前に躍り出た。
あの子……。あたしの命令を無視したわね。
「なんだぁ、お前」
「こいつ、川中じゃん」
「へぇー結構かわいいし」
「じゃ、お前、おれたちと来ないー？」
2人がケラケラ笑う。
ふざけんじゃないわよ。

第7話

あんたら、百合をなめてるんじゃないの？
こーんなにちっちゃくて、かわいくても、百合は喧嘩強いよ。
馬鹿にするんじゃないわよ。
「朝からなんですか！？いちいちめんどくさいことをしてっ。
本当に暇人ですね。千影様と百合の邪魔をしないでください！」
最後の方に変なキーワードを見つけたけど置いておいて。
百合は2人の紀乃川中の男を睨みつける。
結構迫力あるんだよね、こういうときの百合って。
「おい、何生意気なこと言ってんだよ」
「後で泣いても知らないからな」
さっきのケラケラ笑いをやめて、百合に殴りかかる。
2人で殴ろうなんて卑怯な奴だわ。
そんなの、百合のハンデにはならないけどね。
「その言葉、そっくりお返しします！」
百合は軽く体を右に傾け、相手の拳をよける。
クリーム色で、かたにつくかどうかぐらいの髪がさらっと揺れる。
こんなときでもかわいいね、百合は。
百合が鉄拳を顔面にたたきこむ。
2人はその場に崩れ落ちる。
馬鹿だなー。
あんたらみたいなのが百合にかなうはずがないじゃん。
「こりたら学校にさっさと戻ってください」
敵にまでその敬語を止めることはない。
でも、そんな丁寧な言葉づかいが怖い。
恐怖心をあおる。
「ひ、ひぃぃ！」
2人は転がるように逃げて行った。

あ、本当に転んだ。
相当焦ってるわね。

「千影様！」
百合があたしのところまで戻ってくる。
「あたしの命令ぐらい守りなさい」
「すみません。あんな奴ら、百合で充分だと思ったので……」
しゅんとなる。
そんな顔されたら、許してしまいたくなる。
いつもいつもそう。
あたし、この顔に弱いのよ。
「いいわよ。そんなに気にする必要ないわ」
あたしはあの2人にからまれてた男の人に向って手を差し出した。
「大丈夫？」
「あ、ありがとう」
その人は、スーツを着ていて、会社員かなんかだと思う。
ひょろっとしていて、ふちなしの眼鏡をかけている。
「君、名前は？」
「聞くときはそっちから名乗りなさいよ」
失礼ね。
マナーぐらい守りなさい。
「私は渡辺幸助（わらなべこうすけ）」
「あたしは千影」
男の人が？マークを頭に浮かべている。
当たり前よね。
千影、としか名乗ってないんだもん。
ふつうは楠木日向っていわないといけないんだけど。
でも、あたしは千影。
「あたしは千影」
もう一度言う。

この名前を渡辺っていう男の頭に刻み込むように。

第8話

「千影様、百合はよるところがあるので先に行っててください」
学校に着いて、音楽室に向かう途中、百合はそう言って
にこやかにあたしの傍を去って行った。
嵐みたいな子ね。
あわただしいったらないわ。
「はやく戻ってきなさいよー」
廊下をダッシュする百合に向って手を振った。
「はいー。すぐ戻りますからー」
ぶんぶんと手を振り返す百合。
手、とれるわよ。

「あ、千影さん」
音楽室の前で待機する1人の不良。
昨日見たスキンヘッドの兄ちゃんじゃない。
名前は……。なんだっけ？
忘れちゃった。存在感あんまりないからなー。
「原田です。今日、新入生をつれてきましたんんで」
原田だ。
思い出した。
あ、これじゃ思い出したに入らないかな。
「新入生かぁ」
こっちも忘れてた。
新入生の選別やらないと。
うちの不良軍団に入れるかどうかの。
毎年恒例のイベント。
まぁ、ほとんど入れちゃってるけど。

人数多いことにこしたことはないしね。
だから、不良が増える一方。
え？卒業するからプラマイゼロだって？
そんなことないわよ。
あたしたち川崎中学は矢野高校っていう高校と
同盟みたいなのを組んでいる。
実質は主従関係みたいなのだけど。
だから、高校の方に中学の時の不良がにたまっていく。
高校じゃ、単位とらないと卒業できないからね。
そのせいで、どんどんたまっていくの。

「おい、千影さんがきたぞ！」
原田が音楽室の扉を開けた。

第9話

パチパチパチ。

昨日みたいな盛大な拍手が上がる。
あたしは胸を張って堂々と不良たちの前を通り過ぎ、
用意されてる豪華なソファに座る。
まぁ、豪華ってほどじゃないけど。
あたしたち不良にはもったいないかも。
お、みたことない顔がちらほら。
こいつらが新入生ね。
あー、今年は女が多いわ。
嬉しいけど、戦力にならないと無意味だしな〜。

「すみませーん」
甘ーい声がドアのほうから聞こえる。
この声は。
「百合ですー。遅くなりました」
やっぱり百合。
「で、後ろにいる子は？」
皆が警戒心いっぱいにならみつけているのは、百合の後ろに
隠れてる、誰か。
不良……じゃなさそうね。
「百合の従妹の月夜（つきよ）です。実はいろいろあって……。
この子もうちに入れてほしいんです」
百合は申し訳なさそうにうだなれる。
そっちは後で聞くとして。
あたしが気になったのは別の方。
「月夜、あたしの隣に座りなさい」

こっちに来るように言ってみる。
ちらりと見えた髪がとってもきれいだった。
どうな子なのかな？
「は、はい！」
百合の背中からすっと出てくる。
なんだ、そこまで内気なわけじゃないのね。
「わ、私、宮部月夜（みやべつきよ）といいます」
さらっと、腰まである金髪が揺れた。
染めてるんじゃなさそう。
あの金髪は自前ね。
少しウエーブのかかった髪。
すっごく綺麗。
そして、目。
透き通るような青。
海みたいに深いけれど、空みたいに鮮やか。
金髪に青い目。
この子、もしかして……。
「あなた、ハーフかなんか？」
近くまで来た月夜に尋ねてみる。
月夜はビクッと肩を震わせた。

「千影様！ハーフって言うのは禁句……」
「ハーフだなんて言わないでください！！」
百合の静止の声を上回るほどの大声であたしに怒鳴りつけた。
あ、あたし、何か変なこと言った？

第１０話

びっくりした。
心臓が飛び出そうなぐらいびっくりした。

だって、本当に大きな声だったんだもん。
さっきまでびくびくしてたのに、あんなに怒るなんて思わなかった。

あの子、不良とは何の関係もなさそう。
見たところ、だけど。
なのに不良のトップを怒鳴りつけるだなんて。
あー、びっくりした。

「おい、女！千影さんになんて口のききかたしてんだ」
そんな声が上がると、たくさんの場所から文句が飛んでくる。
さっきまでの勢いはどこへいったのやら。
月夜はまた百合の後ろへと戻って行ってしまった。
今度は百合もオロオロしてるし。
しょーがないわねー。

「うるさい！静かにしろ！」
あたしが一声あげると、シーンと静まった。
騒ぎ立てる奴は１人もいない。
王女の特権よね。
私情で黙らせたけどいいわよね、それぐらい。

「ちょっとこの子に聞きたいことあるから。
あー、百合も来なさい」
２人を呼んで、あたしは音楽室からつながってる準備室の

ドアを開けた。ほこりっぽいなー。
ここは、女王しか入れない特別な部屋となってる。
結構広いし、片付いてる。
あとで、掃除しよっと。

ここなら、いろいろ聞けるでしょう。
またなんかあったら困るし、百合も連れてきた。
これなら大丈夫でしょ。
月夜はやっぱり百合の後ろにいる。
尋常じゃないくらいにあたしを怖がってる。
あたし、変なことした？
あたし何もしてないよね？
なのに、怒鳴られるわ怖がられるわ。
なんだっていうのよ。
ちんぷんかんぷんよ。

第11話

「どっちでもいいわ。説明しなさい」
あたしは2人を交互に見た。
とにかく、説明をしてほしかった。
どうにかして理由を聞きたかった。
こんな状態の月夜に説明は無理。
わかってるけど一応言ってみる。

「百合が説明します」
やっぱり、百合がやることになった。
ま、これはどっちがしてくれても構わない。
話さえ聞ければね。

「最初に言おうと思ってたことも関係してきます。
千影様もわかってるでしょうが、月夜はハーフです。
父親は日本人ですが、母はヨーロッパ系なんです」

ヨーロッパ系か。
それで金髪に青い目なのね。

「月夜の母は月夜が7歳の時、借金を残して家を出たそうです」

その瞬間、月夜の顔が曇った。
嫌なんだ。この話をしてほしくないんだ。
だけども、月夜は止めない。

「母がいないことや、金髪に青い目ということで
月夜は学校でいじめられてたんです」

ああ、もうだめだ。月夜は限界だ。
身体が震えてる。
思い出しちゃったんだね。
青い目がよどんでいる。
白い肌がどんどんと青ざめていく。

「それからいろいろあって……。
それで、ここでかくまってほしいんです」

なるほどね。
だいたい予想はできた。
金髪。
中学校に入ったらきっといじめはひどくなる。
当たり前だよね。
それで、川中で勢力をふるう不良軍団に入れてほしいってか。
ここに入ったら、いじめなんてなくなる。
あたしたちにはむかえばどうなるか知ってるし。
それに、川中を守ってるのはあたしたちだもの。
はむかう、なんて選択肢、この学校のやつらにはない。

「百合、いったん出て行きなさい」

あたしはひとまず百合を部屋から出す。
2人で話したかった。
だいたいのことは聞いたし、席を外してもらう。

「で、月夜。あんたまだいいたいことあるんじゃないの？」

さっきからあたしに訴えかけるような視線。

言わせて、あたしにはそう聞こえた。
まだ、この子は秘密をもってる。

「わ、私……」

月夜は小さな声で呟くように言った。

第12話

「私、百合姉に嘘……ついてます」

百合姉(ゆりねえ)って百合のことよね？

確か、月夜って百合の従妹なんでしょ？

事情も知ってるっぽい百合に嘘をつく必要なんてあるの？

「母は、借金で夜逃げしたんじゃないんです」

でも、百合はそう言ってた。

違うなら、何なの？

「母は父からの暴力で……。それに耐えられなくて家から逃げたんです」

家庭内暴力ってこと？！

でも、お母さんがいなくなったってことは……。

「次は私でした。母の次は、私でした」

すっと制服の袖をまくった。

そこには痛々しい痣が。

「私、もう……」

月夜の頬に涙が伝う。

それは止まらない。

どんどんとあふれ出てくる。

プチッと何かが切れた。
ああ、堪忍袋の緒かな？
でも確かにプチッと聞こえた。
アニメや漫画みたいじゃない。
プチッだなんて。
あたしは、今かなり気分が悪い。
放っておけるわけないじゃない。
こんな月夜、放っておけないじゃない。
そんなバカでアホでクズな父親、放っておけるわけないじゃない。
「……あたしが」
「……？」

涙を流しながらもあたしの話に耳を傾ける。
次の言葉を待つ月夜。

「あたしが月夜を守る」

あたし、頭にきた。
あたしはそんなに賢くない。
ムカつくやつは殴り飛ばさないと気がすまない。
このままじゃ、月夜が壊れちゃう。
月夜は、もう駄目だ。
もう、我慢の限界まで来てる。
だから、あたしが殴ってやる。
月夜の気持ちをぶつけてやる！

「あ、りがと……ござい、ます……」
泣きじゃくりながらもお礼を言う。
「ほら」

あたしはポケットからハンカチを出して渡す。
このまま泣いているわけにもいかない。
「ありがとう、ございます」
涙を拭いた月夜はにっこりと笑った。
「それでいい」
あたしも笑い返す。
そうよ、月夜には涙より笑顔のほうが似合う。
とってもかわいいよ、月夜。

第１３話

それから1週間。
今年の春は大きな出来事がいくつもあった。

まず、不良でもない月夜が不良軍団に入ったこと。

かなりイヤそうだったが、みんな一応認めてくれた。
というか認めさせた。

はじめはすごくぎくしゃくしてたけど、今は違う。
かなり打ち解けて、すごろくとかで遊んでる。
よかったよかった。
月夜も楽しそうだし。
もちろん不良軍団もエンジョイしてる。

それから、不良軍団の中で月夜は勉強を教えたりしてる。
もう少し勉強はしないと、ということらしい。
わかりやすくて、内容もおもしろい。
あたしもしっかりおしえてもらってる。
月夜、いい先生になれそう。
生徒は不良たちだけどね。

とっても平和な毎日。
暇だけど、すっごく楽しい。
不良たちとばか騒ぎするのがこんなに楽しいなんて。
全然気付かなかった。
最近はコントにハマってるの。
誰かが提案してコント大会。

あれ、ものすごく面白いイベントだね。
お腹痛くなっちゃった。

こーんな感じで毎日を過ごしてた。
これからもずっとこんな風に過ごしていくんだな。
そう思ってた。
だけど。
だけども神様はそうはさせてくれなかった。

あたしの生活をむちゃくちゃにしたのは1通の手紙だった。

「たっだいまー」
あたしは帰宅して玄関で靴を脱いでいた。
でも、おかしい。
いつもは幸弘叔父さんが玄関まで来てくれるのに。
出かけてるのかなって思ったけど、違うみたい。
靴があるし。
それに車もあるし。
「変なのー」
あたしは部屋にバックを置いてリビングへ行く。
あ制服のままだけどいっか。

「たっだいまー」
あ、いたいた。
幸弘叔父さん、いるじゃないの。
ちょっと焦ったわ。
何かあったのかと思って焦ったわ。
完全にあたしの勘違い。

幸弘叔父さんは紙を見てうんうん唸っていた。

「おーい」
あたしが前にあるイスに座っても全く気付かない。
いったいどうしたのよ。
「ねぇ、幸弘叔父さんってば」
肩をぶんぶんと揺さぶる。
「ああ、ひなちゃん。おかえり」
さっきまで見てた紙をさっと隠した。
あたしに見られたらまずいの？
「さっき何見てたの？」
あたしが聞くと
「い、いや。何でもないよ」
と、うろたえだした。
もう、何だって言うのよ。
「絶対見てた！みーせーてー！」
あたしは幸弘叔父さんから手紙をヒョイっと取り上げ
書かれている内容にばーと目を通す。

「ひ、ひなちゃん……」
あたしの目が途中で止まった。
「な、何よ、これ」
読まない方がいい、そう止める幸弘叔父さんを無視して読み続ける。
「……」
最後まで読んだ。
読んでしまった。
悪魔の手紙を。
何で？
あたし、何で見ちゃったの？
幸弘叔父さんが止めてくれたのに。

あたしの波乱の中3生活をこの1通の手紙が招いてしまった。

第１４話

楠木　日向　　様

いきなりのお手紙申し訳ございません。
あなたも戸惑っていることでしょう。
私は渡辺幸助。覚えていますか？
あのとき、あなたに助けてもらった者です。

私はあのときの恩返しがしたいと思い、お手紙を送りました。
私が勝手に調べさせてもらったところ、日向さんは
経済状況が良くないということが判明いたしました。

そこで提案です。私の家に養子としてきませんか？
日向さんさえよろしければ、私の家に養子としてきませんか？

嫌ならお断りください。
私は恩返しがしたいだけなのです。
嫌がることを強要はさせません。
いい返事をお待ちしています。

渡辺財閥社長　　渡辺幸助

何よ、何よこれ。
どういうこと？

意味わかんないよ。

渡辺幸助。
この名前は覚えてる。
ちょっと前にあたしが紀乃川中のバカたちから助けた男。
あの、サラリーマンみたいな男。

渡辺財閥。
あたしみたいな不良でも知ってる大きな会社。
いろんなことをやってるし、有名。

あの人、渡辺財閥の社長だったの！？
まったくわからなかった……。

そんなこと、どうでもいい。
どうでもいいよ。
それより重要なこと。

……養子。

あたしがあの人の養子に……？
養子として引き取りたいって？
そんな……。
そんなの……嫌。
嫌だ。
あたし、このままがいい。
お金持ちの家になんて行きたくない。
あたし、普通な生活で言い。

貧乏でいいからこのままがいい！

「……ひなちゃん。僕もこんな話変だと思ったんだ。
そしたら電話がかかってきてね。ここに書いてることと
おんなじこと言われたよ。いつのまにかこんな人とかかわってたん
だね」

「ごめんなさい……」

「謝ることはないよ。僕は怒ってるんじゃないんだ。
手紙にもあったけど、僕の家は貧乏だ。
いつもすれすれ。何とかやっていけてる状態なんだ。
ひなちゃんが行きたくないって言うなら、僕はそれでいいよ。
だけどね、やっぱり……」

「……」

幸弘叔父さんは、養子に入った方がいいと思うんだね。
うん、構わないよ。
これが、幸弘叔父さんのためになるなら。
言いたいことはわかるよ。
もう、私を養ってくことは難しいんだね。
わかるよ。言わなくったってわかるよ。
だって、幸弘叔父さん顔にでやすいもん。

でもね。でも本当は嫌なんだ。
普通でいたいんだ。

だけどこれが幸弘叔父さんへの恩返しになるなら。

あたしの気持ちを伝えられるなら。
ありがとう、のかわりになるなら。
あたし、それでも構わないよ。

第15話

「あたし、行くよ」

決めた。
あたしは養子に行く。
もう、普通に戻れなくても。
普通じゃなくなっても。
あたしは行くよ。

「……いいのかい？」
「いいよ。あたしは気にしてないから」

気にしてなんかないよ。
別にいいよ。
むしろ、感謝してるよ。
今までありがとうって。
次はあたしの番。
あたしがお礼をしなきゃいけない。
だから、行くよ。

「わかってるよ。言いたいことはわかってるよ」
「……」

幸弘叔父さんは何もしゃべらない。
何も言わなくてもわかってる。
あたし、わかってるから。
だから大丈夫だよ。
あたしは平気だよ。

心配しないでよ。
あたしは女王よ！

……そうだ。
あたしは女王だ。
川中の皆をどうすればいいの？
どうしよう。
養子となったら転校しないといけないよね。
じゃあ、川中はどうなるの？
女王はどうなるの？
あたしはどうすればいいの？

だけど、あたしは行かなきゃ。
優先しなきゃいけないことがあるから。
ごめんね。
あなたたちは大事だけど、1番じゃない。
もう、はっきりと順位がついてしまってるから。
あたしがやらないといけないことじゃないから。
変わりはいくらでもいるから。
だからごめんね

第１６話

「これでほとんど終わったかな」

あたしは部屋をぐるっと見回した。
あたしの大切なものを机から取り出してダンボールに入れた。
もちろん、全部持って行きたいけど、迷惑になりそうだし。
だから、選ぶことにした。
あたしのアクセサリー、あたしのぬいぐるみ。
ダンボールにそっと詰め込んだ。

少し前に、渡辺さんに電話した。
渡辺って呼び捨てにするのもどうかと思って「さん」をつけることにした。
これならいいよね。
手紙の中には名刺みたいなのが挟んであって、電話番号もあった。
それを見て電話をかけた。
ＹＥＳの返事をするために。

その次の日、渡辺さんが訪ねてきた。
細かい説明とかするために。
あたしが養子に行くのは１週間後になった。
１か月ぐらいがいいのでは、と渡辺さんは言ったけど却下。
だって決心が鈍る。
行きたくないって思ってしまう。
だから、早いうちに行きたかった。
あたしが選んだのは、１週間だった。

残り、３日。
あと３日であたしはこの街からいなくなる。
残されたのは３日間だけ。

さぁ、そろそろ学校に行かないと。
また遅刻しちゃう。
あの鬼センセーもみられなくなるのか……。
わざと遅刻しちゃおうかな。
悔いのないようにしとかなきゃ。
時間は巻き戻せないんだから。
そういえば、百合にあのペン返しておかなきゃ。
月夜にあげようと思って買った髪留め、渡していない。

やることがいっぱいあるね。
今のうちにおわらさないと。
あとは何が残ってるかな？

第17話

「千影様。最近元気がないです。どうなさったんですか？」
昼休憩、外で幸弘叔父さんが作ってくれたお弁当をつついている真っ最中、百合は唐突に聞いてきた。

「そんなことないわよ」
あたしは笑ってみた。
それでも百合は心配そうな顔をする。

「私もそう思います」
あたしの右でサンドイッチにかぶりついていた月夜も口を出す。

あらやだ。なんでわかったの？
もしや、バレバレ？！

エスパーか。
エスパーなのか？！

「違うわよ。最近寝不足なだけ」
あたしは卵焼きを口に放り込んだ。
幸弘叔父さん特製の卵焼き。

これも食べられなくなるのかぁ。
残念だな～。

あたしはみんなにはギリギリまで言わないことにした。
転校のこと。
結局あたしはお嬢様学校「桜ヶ丘女子中学校」っていうとこに
転校することになった。
みんな知ってる有名な学校。
春だし、区切りもまぁまぁいいしね。
わかってはいたけど、息苦しそうなところ。
ここがいいな。
ここにいたいな。
でも、それは叶わないんだよね。

あたしが決めたことなのに。
どうしてこんなにも苦しくなるの？

第１８話

「これ、どうぞ。髪止めのお返しです」
月夜は紙袋をあたしに差し出した。
あぁ、前にあたしがプレゼントしたやつか。
今日は付けてないけど、いつもつけてきてくれる。
「開けていい？」
月夜がうなずいたのを確認して、紙袋を開ける。
丁寧にシールをはがして中身を取り出す。
この感触は……。
「ハンカチ？」
予想通り。ハンカチだった。
紫色で、端には黒猫のシルエットの刺？。
白いレースがついたかわいいハンカチ。
月夜らしい趣味……。
でも、すっごく嬉しい！
「ありがとう！月夜。大事にするわ」
「私も髪留め、大切に使っています」
月夜はにっこり笑う。
ホント、美人だな～。
うらやましすぎるんだけど。
百合も百合でめちゃくちゃかわいいし。

従姉妹って似るんだねぇ。
仲もいいみたいだし。
いいなぁ。
従姉妹って。

「そろそろ、音楽室へ行きましょうか」
「そうね」

百合は弁当箱を風呂敷で包み立ち上がった。
月夜もたって制服をただす。

「私は放課後行きますね」

百合とあたしは音楽室へ。
月夜は自分の教室へと向かった。

月夜もさすがに授業をさぼるのはいやらしい。
ま、不良ってわけじゃないしね。
そう考えるのも当り前か。

音楽しての中はやっぱり煙くさい。
換気ぐらいしなさいよ。

「あ、すんません」
あたしが窓を開けていると、原田が手伝ってくれた。
原田は気がきくし、いいやつだと思う。

「もうすぐかぁ」
あたしは窓から身を乗り出して呟く。
……もうすぐ、だ。

どうやって切り出そうか。
転校のこと。
それとも、言わずに行こうか。
何も言わずに行こうか。
次の日からドロン。
それもいいかもね。
言わなくてもいいんだし。

あたしにはそれが一番いいような気さえしてきていた。
そう、何も言わずに一人で行くの。
いいじゃない、それで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9852z/

あたしは天下のオジョー様！

2012年1月5日20時54分発行